

ネーネーズの「糸綾」

2010年4月9日 ライブハウス島唄にて

み やま みち ひと
海山道人

糸綾

「ネー、ネー、ネーネー
ター。ネー、ネー、ネーネ
ター。四人（よたい）揃
てネーネーズ、アリ、ネ
ーネーズ……」

はじけるような4人の歌
声が「ライブハウス島唄」
いっばいに響き渡る。

楽しそうに、幸せそうに、
そしてちよっぴり得意そう
に歌う彼女たちを見て、僕
は嬉しかった。

なにしろ、今回はこの歌
を聴くために沖繩に来たの

だから。

2009年8月から十二月までの5か月間、上原清さん、
比嘉真優子さん、仲本真紀さんの3人で切り盛りしていたネ
ーネーズが、今年の1月1日より新たに保良光美さんを迎え、
ようやく本来の4人に戻った。彼女たちには4人揃わないと
歌えない歌がある。それがこの「糸綾」なのだ。

ネーネーズのステージは、通常バックに録音された伴奏が
流れる。しかし、糸綾は彼女たち自身が演奏する2本の三線
と三板と太鼓だけで歌われる。それだけで十分な音量と多彩
さを確保しているのは、彼女たちの底力の一端を示すもので
ある。自分たちのことを、少し自慢げに紹介するこの歌は、
歌っている彼女たちを見ながら聴くと、より楽しい。

ネーネーズはやはり4人でなければ……。

厳しい雰囲気だった昨年十一月のステージと全く異なり、
4人ともりラックスし、本当に楽しそうだ。新しく入った保
良さんは、飾らない人柄の温かい心の持ち主であることが、
その歌いぶり、しぐさ、トークなどからよく分かる。良い人
が入ったと思う。

今回の席は、向かって左から2番目で歌っている上原さん
の真ん前である。マイクを通さない彼女の生の声が聞こえて
くる。思えば、一昨年に初めてライブハウス島唄でネーネ
ーズを聴いたときのメンバーのうち、残っているのは上原さん



一人になってしまった。ずけずけと物怖じせずによくしゃべる人ではあったが、その一方で人懐っこく、何かしら人を引きつけるものを持っている。

僕は眼前の上原さんの歌に耳を傾けた。



彼女の歌はいつもの確かな表現を持ち、他の3人とのバランスをよく考えて歌われているように思える。話す声はハスキーだが、歌うとそれは目立たない。一昨年に比べてぐっと安定感が増した。歌に合わせた動作は指の先まで神経が行き届いている感じで、「止め」のタイミングと形がすばらしい。

時々、左肩が右肩よりも上がって見える。不思議に思っていたが、三線を持ったときの彼女を見て納得した。ぴたりと決まっているのである。おそらく小さいときから三線は体の一部のようになっているのであらう。左肩が上がるのはそのためであらう。

一昨年の上原さんとは別人のように成長した彼女が目前にいる。体は小さいが大きな度量の持ち主であると感ずる。このチームの今後の発展は、彼女がその度量をどれだけ發揮できるかということと大いに関係しているだろう。

うむかじ

第1ステージの最初の曲は、何年も前から「明けもどろ」であったと思うが、今回は、装いも新たに「ユンタ」で開始され、「明けもどろ」はこの歌に続いて登場した。神々への素朴な祈りを歌うこの歌は、ネーネーズのステージのシンボルのようなものである。

来るたびに印象が違ふ。今の若いメンバーも、荘厳な雰囲気を持つこの曲を、歴代メンバーと同じように心をこめて歌っている。しかし、この曲のむずかしいところは、単に歌がうまいというだけでは本当の姿を伝えることはできないという点にある。

彼女たちはうちなー生まれ、うちなー育ちとはいえず、まだ島の神様たちと一緒に暮らしたことが無いのではなからうが、上原さんも比嘉さんも仲本さんも保良さんも、これからの人生の中で多くの神々に出会うであろう。この中の誰かが一人の神様に出会うことに、彼女達の「明けもどろ」は更に深い内容を獲得していくであろう。

さて、第1ステージの5曲目は「うむかじ」である。知名度男作詞・作曲になるこの歌は、去って行ってしまった恋人を想つ、切なく、哀しい歌である。

この主人公は男だろうか、女だろうか。歌っているのがネーネズなので、女性の心を歌っていると思ってしまうが、男に置き換えても何らおかしくはない。

長い人生の中で、こんな感情を一度でも持てた人は幸せである。その人の人生が豊かな情緒に満ちた素晴らしいものであることの証であるからである。この歌は、最後の一節がソロで歌われることがある。予想通り、ここは比嘉真優子さんが歌った。僕にとつて今回で3回目となるこの人は、来るたびに姿が変わる。

最初は、大きな口をあけて天真爛漫に歌うアララちゃんのようだった。2回目に来たときには、まるで粹な新橋芸者のような色っぽい姿になっていた。ところが今回は、歌うことにくるくると表情が変わる百面相のお姉さんに変身していたのである。

あるときはやさしい表情のお地蔵様のようにつに、あるときは



ふつくらした頬つべたのお多福のようにつに、あるときは口を尖らせたヒョットコのように、あるときは角ばった鬼瓦のようにつに、歌と関連して顔の表情がどんどん変わっていく。

抜群の音量と歌のうまさは天性のものであろうが、最適の響きを引き出すために、彼女は顔面のあらゆる筋肉を使っている。その結果が百面相なのだ。

このネーネズのメンバーは全員、なお未だ発展途上にある。比嘉さんも同じで、前回に来たときに比べてまた一段進歩したと感ずる。百面相はその途中の姿であるに違いない。

がんばれ百面相。でも少し太ったな。

安里屋ユンタ

この曲に元歌があるとは上原さんの説明を聞くまで知らなかった。「安里屋節」と呼ばれているらしい。その元歌を比嘉真優子さんが歌つた。これまで聞いたこともなく、すぐには耳になじまない感じのその歌は、もちろん歌詞の意味は分からないが、彼女の名唱も相まって、聴き終えて心に残った。このネーネズはこういうこともできるのだ。

比嘉さんの歌つたのが本当の「安里屋ユンタ」で、いわゆ

る「安里屋節」である。今我々が知っているのは、星兄（1905～1977）作詞・宮良長包（1893～1939）作曲の「新安里屋ユンタ」で、詞の一部が標準語になっている。これは原曲の直訳ではなく、星が新たに作ったものである。我々が馴染んでいるこの歌は、「新」の語をつけずに単に「安里屋ユンタ」と呼ばれるため紛らわしいが、ほとんどの歌手が歌っているのはこちらのほうである。

1番から2番・3番……と続く歌詞の後ろに、いつも「マタハリヌチンダラカマシヤマヨ」という八重山方言がくっついている。これは「また逢いましょう、美しき人よ」という意味であるという。

この歌は、初代ネーネズの時代から歌い継がれてきた名曲で、詞は、上原直彦がネーネズのために特別に書き下ろしたものであるらしい。今のメンバーによる演奏も美しく郷愁に満ち、聴いていてしみじみとした気持ちになる。

ふたたび「黄金の花」

第2ステージも最後を迎えようとしている。まなじりを決し、必死の面持ちで歌っていた昨年とは様相を異にし、おだ

やかでやさしい「黄金の花」が流れてくる。同じ歌とは思えない。心安らぐひとときだ。

最後のソロを仲本真紀さんが歌うことは知っていた。楽しみにしながら耳をすました。彼女は華奢な体つきなので、声



もか細いという印象を持っていたが、よく聴くと意外にポリウムがあり、明るくはないが色彩豊かで陰影が濃い。この歌の最後を飾るにふさわし

いと思っ

曲が終わったあと、客席にいた2歳ぐらいの女の子が、喜んで「キヤー」と叫んだ。みんな何が起こったかわからず、一瞬キョトンとした表情を見せたが、それが最前列にいた女の子の声だと分かると、メンバー全員顔がほころんだ。そのとき一番近くにいた仲本さんが手をふり、白い歯を見せて笑顔で応えたのが印象的だった。笑顔のやさしい人だ。

チーム・ネネズ

このネネズのメンバーは、若い人で二十歳 最長でも二十二歳ととても若い（でも保良さんは今回のステージで、もうすぐ四十二歳になると言っていた???ウソ）。町に出ればごく普通のお姉さんたちなのであるが、ステージに立ったときはプロとしての矜持をもち、すばらしい歌を聞かせる。そのギャップがすごい。

ところで、彼女たちのアンサンブルは、通常の意味で決して良いとはいえない。声質は一人ひとりもちろん異なっているが、それ以外に、歌い方も節や装飾音のつけ方も一人ひとり異なっている。

これがオーケストラだと、それぞれの楽器は全く同じ音で鳴ることが必要条件である。もちろんフルトヴェングラーの振ったベートーベンの交響曲の録音の中には、指揮者の棒について行けずに不揃いのものもあり、これなどは芸術的に特別な効果を生んでいるとはいえず、例外中の例外である。本来アンサンブルは精密であるのを佳とする。



る。

しかし、ネネズのアンサンブルは決して精密ではない。ばらばらかというところでもない。彼女たちはそれぞれ自分に合う歌い方を持っていて、それをそのまま4人で歌うのである。そこには一般的なアンサンブルの概念は存在していない。

でも、「糸綾」で歌っているように、四人とも共通した環境に生まれ育った。そのバックグラウンドがあるために、みんなが勝手なうたい方をしてもちやんと統一が取れている。

これは、バスケットボールなどのスポーツのチームプレーに例えられよう。彼らは、身長も違えば得意とするプレーも違う。ゲーム展開の中では、それぞれがその場面場面で最適の動きをするように心がける。いちいち言葉で言わなくても、以心伝心でそれぞれのメンバーがゴールを目指して的確に動く。シュートするのは誰でも良いのだが、各メンバーの動きは同じであってはならない。それぞれが個性あふれるプレーをしつつゴールを目指す。ネネズのアンサンブルはこれに似ている、と思う。

この二年足らずを見るだけでも、彼女たちはどんどん変化

している。「成長している」と言い換えることもできる。

僕はほとんどの場合、夏に沖縄を訪れる。今年も9月に予定が入っている。しかし、その頃には4人に戻ったネーネーズがすっかり完成してしまっているだろう。僕は、新しいチームを作り上げていく途中の彼女たちの姿をどうしても見なかった。今回沖縄に来た第一の理由である。

無理をして来た甲斐があった。「糸綾」を聴くことができたのは収穫だった。今度は絶対「片使り」を歌ってもらおうと僕は固く心に決めていた。今回十分に聴き取ることのできなかった保良さんの歌も耳をダンボにして聴こう。

この歌もまた、4人揃ってはじめて歌える歌なのだから……。

注

ネーネーズ

1990年に沖縄で結成された4人組の女性ヴォーカルユニット。初代ネーネーズが1999年に解散したあと、後続のネーネーズが伝統を受け継ぎ、その後も次々にメンバーが交代して現在に至っている。現在のメンバーは上原渚さん、比嘉真優子さん、仲本真紀さん、保良光美さんで、いずれも20歳から27歳までの非常に若い人たちである。歴代メンバー達の多くは、ネーネーズを卒業しても活動を行っており、その演奏も興味深い。

糸綾

上原直彦作詞 知名定男作曲。ネーネーズの自己紹介の歌である。歌詞は沖縄の言葉なのでよく分らないが、それでも、得意げに自分たちのことをちょっぴり自慢しながら歌うこの歌は、聴いていてほほえましい。CDではアルバム『モリアル』ネーネーズオキナワ』の中に収録されているのが唯一のものだと思っが、現在の若いメンバーの歌もすばらしい。

ユンタ

知名定男作詞 作曲。ユンタとは「結歌」と書き、もともと労働歌であると聞いたが、人と人との心を結ぶ歌という意味も持っているらしい。ネーネーズには「ユンタ」と名のつく歌がいくつもある。ここで歌われたものは、『アルバム』ユンタ』の冒頭に収録されている荘厳で神秘的な雰囲気を持つもので、ネーネーズの4人が沖縄の神様となって姿を現し、俗世間の人々に語りかける、という設定であるらしい。

ウムカジ

知名定男作詞 作曲。ウムカジは「面影」の沖縄方言である。非常に叙情的な歌詞で、やはり叙情的で美しいメロディーに託して切ない恋心が見事に表現されている。CDに残された歴代ネーネーズの歌唱はもろろすばらしいが、現在のメンバーの歌も聴き心えがある。彼女達もまた、いつの日かこのような恋を経験するのだろうか。